

第3会場 セッション2 No. 3	主治医が研修医である患者の満足度の調査 ～より良い教育病院を目指して～
	発表者 後藤 僚太 (岐阜県 国民健康保険飛騨市民病院) 共同研究者 工藤 浩、栗田 元和、高橋 健児、藤岡 勇人、岡田 誠、黒木 嘉人 (岐阜県 国民健康保険飛騨市民病院)



↑ 前列は研修医5人、医学生1人、病院長

【はじめに】

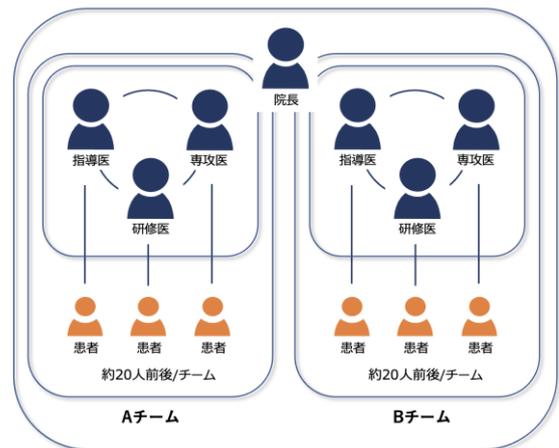
当院では1ヶ月間の地域医療研修として岐阜県、愛知県、富山県から年間約40名の初期研修医を受け入れており、毎年希望者が殺到する。人気の秘訣は「研修医であっても主治医として診療を行うこと」である。

当院の近隣の大学病院、県立中央病院等の大きな総合病院では、研修医が入院患者の主治医として診療を行う機会はほとんどない。私自身もそうであったが、研修医は上級医の後をついて周り、時に処置や手技を上級医の指導の下で行うことはあるが基本的には見学しながら教えてもらうことが中心となる。

(もちろん日本全国には研修医が主治医となっている病院も多少はあるが、少数派であることには違いない。) 専門医に最新の医学知識や治療内容を教えてもらい学ぶことも重要であるが、知識だけでは成長しない。やはり主体的な経験が成長の1番のエネルギーになると私は考えている。

当院では指導医、専攻医、研修医で1チームとするチーム制の診療体制を取っている。それぞれの患者に対して主治医が決められており、主治医がリーダーとして治療方針を決定するが、毎朝・毎夕方のカン

ファレンスでチーム全員が意見を出し合い、患者ひとりひとりの現状や方針を確認する。チームのバックアップの下で研修医も常勤医と同じように主治医として診療を行う。



↑ 当院の診療体制の模式図

きめ細かなフィードバックを受けながら主体的な研修を行うことができるため、1ヶ月の研修を終えた研修医の満足度は平均95%前後と高く、次年度の研修医へのロコミも伝わり希望者は後を絶たない。

一方で研修医は経験が浅く勉強中の身であるため、患者が不安や不満を抱く可能性もあるのではないかと考えた。研修医が満足していても患者が不満を感じていれば本末転倒であるため、今回は主治医の研修医に対して患者自身がどのような思いを抱いているのかを調査した。

【方法】

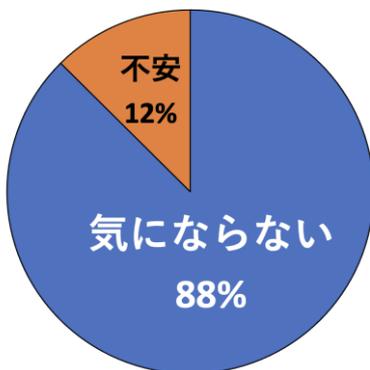
2024年5月～9月に当院の一般病棟に入院し、主治医が研修医である患者を対象に退院直前に匿名のアンケート調査を行い、満足度や研修医への思いを回答してもらった。意識障害や認知症のため自分で書類にサインをできない患者は対象から除いた。

【結果】

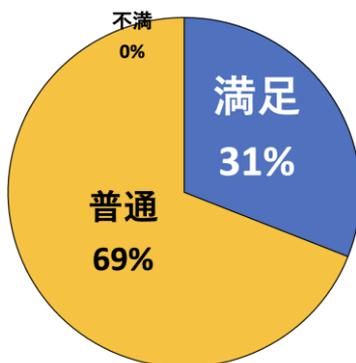
30代～90代の男女合計16人に回答を得た。男性は11人(69%)、女性は5人(31%)、平均年齢は67.6歳であった。入院疾患名は出血性胃潰瘍、気管支喘息発作、脊椎圧迫骨折、他院で手術後のリハビリ目的での転院など急性期から慢性期まで様々であった。

アンケート結果は以下ようになった。

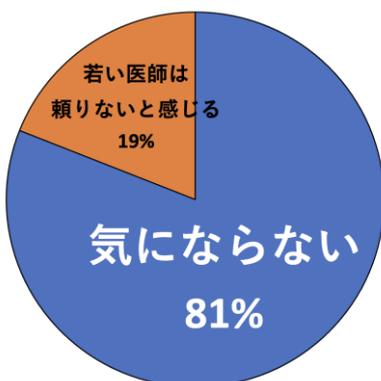
① 主治医が研修医であることに不安を感じるか？



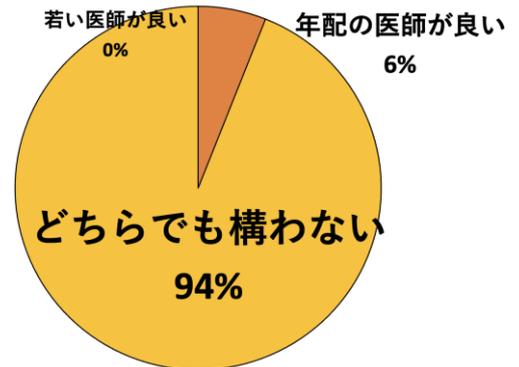
② 主治医の対応に満足か？



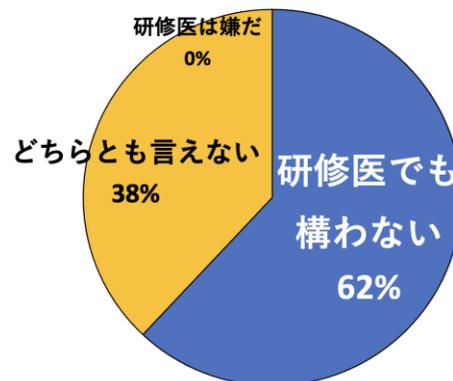
③ 若い医師は頼りないイメージがあるか？



④ 主治医の年齢を選べるのであれば、年配の医師と若い医師のどちらが良いか？



⑤ もし今後入院することがあれば、主治医が研修医であっても構わないか？



フリーコメントとして、「熱心に診てくれた」、「頻繁に会いに来てくれることが良かった」、「病状を詳しく説明してくれた」、「研修医が不安そうだと患者も不安になる」といった回答を得た。

【考察】

今回のアンケートでは研修医に好意的な意見が多かった。チームのバックアップにより診療内容は上級医と遜色ないことや、研修医自身が患者と積極的にコミュニケーションを取ったり、丁寧に身体所見を取ったりする姿勢が患者の満足度につながっていると考えられた。一方で研修医や若い医師に多少の不安を抱く患者がいることも事実であり、チーム回診や病状説明をともに行う等の上級医の適切なサポートが重要であると考えられた。

【結語】

適切なサポート体制、積極的な姿勢があれば主治医が研修医であっても患者の満足度向上は十分可能である。